



# 快適な住環境 提案したい

東京都市大環境学部准教授

リジナル・ホーム・バハドウルさん 46

(横浜市)

「皆さん、今日の講義を始めたいと思います」。東京都市大環境学部(横浜市都筑区)の教室に、滑らかな日本語が響いた。准教授として学生たちに環境学を指導。言葉が理解できず、きょとんとした顔をしている留学生には、英語で説明を加えることもある。

ネパールの首都・カトマンズの北西に位置するサツレ村の出身。数年前に電気が通ったばかりの山間部の農村地域だ。小学校時代は毎朝2時間かけてはだしで通学。幼少の頃から橋や道路に興味があり、大学進学を望んだが、経済的に難しかった。高校卒業後に就いたアイスクリーム販売の仕事は、給料が日本円で月約950円しかなく、学費には到底及ばなかった。そんな頃、ホテルのエレベーターボーイの募集があるこ

## 母国で収集した調査データ



●現地調査には欠かせない愛用の計測器を手にするリジナルさん(横浜市都筑区) ●母国で集めた調査データ。英語、ネパール語、日本語で書かれている



とを知った。エレベーターは見たこともなかったが、大きな病院で見つけたエレベーターで昇降操作を練習して面接に合格。ほかの仕事と掛け持ちして学費をため、大学の工学部建築学科に合格した。来日のきっかけは、妻・玲子さんとの出会い。アルバイト先のホテルに宿泊した玲子さんが、記念写真を送ってくれたことで英語での文通が始

まり、日本への興味も深まった。1992年に来日し、芝浦工大に留学。奨学金の面接では「なぜ日本なのか」と聞かれ、「日本の建築は美しくて地震に強い」と答えた。卒業後は京大の大学院でも学んだ。

建物の快適性や伝統建築の環境をテーマに研究している。意匠にも興味があったが、才能の限界を感じ、気候と風土、環境の観点から建築の研究をしようと決めたという。2006年から3年近く、英国の大学に研究員として勤務した際、学生の指導法やデー

タの収集・分析をさらに深く学んだ。

大切にしているのは、2000年代初頭にネパールの六つの地域で集めたデータだ。

農村家庭の囲炉裏で使用するまきの量や、まきによる空気の汚染などを調べた。「ネパール語、英語、日本語が混在する何冊ものノートは、苦勞して作った私の宝物。英国に行っている間は妻の実家で大切に保管してもらった」と振り返る。

「室内の空気汚染の問題や、快適さ、燃焼効率を上げるにはどうすれば良いかは、ネパールの生活環境の改善にもつながるテーマ。今後、データを分析し、しっかりとした論文に仕上げたい」と意気込む。愛用の観測機器も宝物の一つだ。

自身の体験から、母国の発展には教育が一番大事と痛感し、03年に大阪でNPO法人「パール・ピパール奨学金」を設立。現在は理事長を務める。日本人の協力を得て資金を集め、サツレ村で学校を建設・運営したり、道路を造ったりと支援を続けている。

法人名の由来は、ネパールで山間部を行き来する旅人のために、休憩所の目印として植えられている「バル」(男の木)と「ピバル」(女の木)と呼ばれる2本の菩提樹だ。長年にわたり旅人を守ってきた菩提樹のように、ネパールの子供たちも人の助けになる人間に育ってほしいという願いを込めた。

ネパールでは昨年の地震で多くの人が亡くなり、建物被害も甚大だ。「どんな仮設住宅が快適か提案したい」。日本で暮らしながらも、故郷のことを忘れたことはない。

(加藤干城)

■この記事・写真等は読売新聞社の許諾を得て転載しています。無断で複製等、著作権を侵害する一切の行為を禁止します。